

令和7年10月10日

保護者の皆さまへ

吹田市立佐井寺中学校
校長 大江 健規

令和7年度 全国学力・学習状況調査の分析について

本年度、3年生を対象として「令和7年度全国学力・学習状況調査」を実施し、7月に個人ごとの結果をお返ししました。また吹田市でも、今回実施した調査結果の概要を吹田市のホームページを通じて公表しております。

この調査は中学校の最終学年のみを対象とした調査であり、教科は、国語と数学、理科に限られ、測定されたものは学力の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。そのことをまず踏まえつつ、調査によって得られた課題を明らかにし、その改善に全力を注ぐことが、調査本来のねらいであると考えています。

対象となった3年生には、よりきめ細やかな指導ができるよう取り組みを進めるとともに、学校全体として課題に応じた学力向上につながる具体的な指導法の工夫改善も図ってまいります。各ご家庭におかれましても、以下の分析結果をもとに、今後の家庭学習の指針として、参考にさせていただきますようお願いいたします。

1 教科に関する調査結果の分析

●国語科《概要》

【知識・技能】において全国平均とほぼ同じ。

【思考力・判断力・表現力等】において全国平均を上回る。

●国語における成果と今後の改善点について

【書くこと】【読むこと】において全国平均を上回る結果となりました。

しかし、「変換した漢字として適切なものを選択する」問いの正答率が低かったです。

「目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたい事や、根拠を明確にして考えることができるか」をみる問いでは、全国平均より上回っていました。

今後は、自分の考えを伝えたり、情景を描写したりする際の効果的な表現の工夫や、適切な文言、漢字を選択して書けるよう、授業の中で取り組んでいきたいと考えています。

●数学科《概要》

【知識・技能】及び【思考力・判断力・表現力等】において全国平均を上回る。
〈数と式〉〈図形〉〈関数〉〈データの活用〉全てにおいて全国平均を上回る。

●数学における成果と今後の改善点について

正答率においては、ほぼ全ての問題で全国平均を上回っています。

今後は、生徒が興味・関心を持てるような身近な課題を、理科等の他教科と連携しながら取り入れていきます。主体的に収集したデータを分析し、根拠を持って数学的表現などを取り入れながら説明する活動や、系統的な統計的処理を経験できるような授業デザインを研究する必要があると考えています。

●理科《概要》

【知識・技能】において全国平均を上回る。

【思考力・判断力・表現力等】において全国平均をやや上回る。

●理科における成果と今後の改善点について

【知識・技能】に関する問いの正答率は全国平均よりも上回っていますが、「知識及び技能を活用して、変える条件に着目した実験を計画し、予想される実験の結果を適切に説明できるかどうか」を見る問題や、「結果を検討して、そこから推定することができるか」を問う問題の正答率が全国と共に低かったです。

このことから、学習したことや、今まで経験したことをもとに実験の仮説を立てて見通しを持って実験に取り組み、結果を文章や、グラフ、図等でまとめ、結果から考察し結論付ける経験を積む必要があると考えています。本当にその結論で間違いないのか、別の仮説はないのか、仮説と違う結果になった場合は、実験内容を見直し、実験を再度行い確かめる事も行うことも大切です。常に疑問をもち、検証する習慣をつけていきたいです。

2 生活習慣や学習環境等に関する調査の傾向

【学習環境・生活環境について】

「学校へ行くのが楽しいですか」、「自分と違う意見について考えるのは楽しいですか」、「先生はあなたの良いところを認めてくれていると思いますか」といった質問に対して、「当てはまる」と答えた生徒の割合が全国平均を上回っており、これらの項目は年々少しずつ向上しています。これらの結果から、生徒たちが互いの違いや良さを認め合いながら、前向きに学校生活を送っている様子が見えてきます。今後も、生徒一人ひとりの意欲的な姿勢を尊重し、個性や成長を丁寧に見取りながら、教育活動を進めてまいります。

また、「学校の授業時間以外に、普段一日あたり2時間以上勉強している（学習塾や家庭教師等での学習時間も含む）」と回答した生徒の割合も全国平均を上回っており、日常的に学習する習慣が身につけていることが分かります。今後は、より効果的な学習方法の定着を図り、学びの質の向上を目指してまいります。

一方で、「1日あたりどれぐらい読書をしますか」という質問では、約70%の生徒が「30分より少ない」と回答しており、読書時間の減少傾向が見られました。近年、スマートフォンの使用時間が増加していることが、読書量の減少に影響を与えている可能性も考えられます。

こうした状況を踏まえ、本校では、読書の意義を改めて見つめ直すとともに、スマートフォンとの適切な付き合い方について、生徒自身が考え、行動できる力を育む取り組みを進めてまいります。これは、キャリア教育の視点においても重要な「セルフマネジメント（自己管理能力）」の育成につながるものです。情報機器との向き合い方を自ら調整し、時間の使い方を計画的に管理する力は、将来にわたって必要とされる力であり、学校教育の中で意識的に育てていくべき資質の一つと考えています。

【教科・学習について】

「国語の授業で、文章を読み、その文章の構成や展開に、どのような効果があるのかについて、根拠を明確にして考えていますか」や、「数学の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っていますか」、「自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたか」といった項目に対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた生徒の割合が全国平均を上回っていました。

これらの結果から、授業の中で、根拠を明確にして考える力や、相手に分かりやすく伝えるための工夫を重視した活動が定着していることが分かります。特に国語の調査結果においては、こうした取り組みの成果が明確に表れていました。

一方で、「1・2年生の時に受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」や、「ICT機器を使って情報を整理する（図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる）ことができる」といった項目では、

「とてもそう思う」「そう思う」と回答した生徒の割合が全国平均を下回っていました。

この結果を、ICT 機器の効果的な利活用について、授業方法の工夫・改善に向けた課題として捉えています。ICT 機器は、単なる操作スキルの習得にとどまらず、情報を整理・可視化し、思考を深めるための「道具」として活用できる力を育むことが重要です。今後は、こうした視点を踏まえた授業づくりを進め、ICT 機器を学びの質を高める手段として位置づける教育実践を研究してまいります。

教科の学びを通して、思考力・表現力・情報活用能力といった、これからの社会を生き抜くために必要な力を育む教育を、今後も大切にしていまいります。

3 今後の取り組み

今年度、本校では、生徒一人ひとりの可能性を信じ、「公正で、真正な学びを」を教育活動の柱として、取り組みを進めています。

「真正な学び」とは、知識や技能を習得することにとどまらず、それらを活用して、より質が高く、深くて重みのある本物の学びへとつなげていくことを意味します。授業や学校行事など、様々な教育活動において、生徒が可能な限り高い課題に挑戦できるよう工夫を重ねており、粘り強く思考を重ね、自分なりの考えを持つとする姿勢が、調査における無回答率の低さにも表れています。

一方で、ICT 機器の利活用を含め、子どもたちの学びをより一層支えるためには、授業方法のさらなる工夫・改善が求められています。ICT 機器は、情報を整理・可視化し、思考を深めるための道具として活用できる力を育むことが重要です。そのためには、単なる操作にとどまらず、教科の学びの中で ICT 機器を効果的に活用することを意識した課題設定や授業づくりが必要です。今後は、こうした視点を踏まえた教育実践を学校全体で研究し、学びの質の向上を図ってまいります。

また、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、互いの意見や考えを聴き合い、学び合える授業づくりを意識しながら、引き続き学校全体で取り組みを進めてまいります。

学びに向かう力を持った子どもたちが、これからの時代に求められる主体的な学びを活かし、人生や社会に貢献できる力を育むためには、保護者・地域との連携と協働が不可欠です。学校・保護者・地域が「目標やビジョン」を共有し、地域社会全体で子どもたちを育てていくことが、今まさに求められています。

今後とも、本校の教育活動に、温かいご理解とご協力をよろしくお願い致します。